

# インクルーシブ教育に必要な教員養成に関する研究 —教員養成大学の授業における基礎プログラムの検討—

鳥海順子\*・廣瀬信雄\*・小畑文也\*・古屋義博\*・吉井勘人\*・渡邊雅俊\*\*

## I. はじめに

本研究は、我が国のインクルーシブ教育推進の動向を踏まえて、今後どのように教員養成を行っていくべきか検討を行っている（磯貝・廣瀬・小畑・古屋・渡邊, 2013; 鳥海・廣瀬・小畑・古屋・渡邊, 2013, 2014a, 2014b, 2014c）。2012年7月23日に中央教育審議会初等中等教育分科会から出された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」によれば、「すべての教員は、特別支援教育に関する一定の知識・技能を有していることが求められる。…中略…これについては教員養成段階で身につけることが適当である」としている。ただし、「すべての教員が多岐にわたる専門性を身に付けることは困難なことから、必要に応じて、外部人材の活用も行い、学校全体としての専門性を確保していくことが必要である」とも記述されており、地域のセンター的機能を担う特別支援学校の特別支援教育コーディネーターも身近な外部人材として、今後一層必要とされるものと考えられる。

以上から、教員養成大学では今後、教員志望の学生すべてが特別支援教育の基本的な力量を有するよう養成する一方で、特別支援学校教員を目指す学生には、障害に応じた専門的知識と技能の他に、地域支援（センター的機能）に必要な力量も合わせて養成することが求められるであろう。本研究では、インクルーシブ教育を担う教員養成の段階を以下のような4段階に区分し、研究を進めている。

- （第1段階）通常の学校の支援機能を高めるために、障害理解や支援の基礎を学ぶ**基礎プログラム**（すべての教員養成コース）
- （第2段階）授業のユニバーサルデザインや多様な児童生徒を含む学級経営の方法を学ぶ**初級プログラム**（特別支援教育特別専攻科「特別支援学校教諭1種免許状取得コース」）
- （第3段階）特別支援学校の地域支援（センター的機能）を充実させるために、教育相談を中心に学ぶ**中級プログラム**（教員養成大学の「特別支援学校教諭

---

\* 山梨大学大学院教育支援科学講座

\*\* 國學院大學人間開発学部

1 種免許状取得コース)

(第4段階) 支援先の校内支援や実践力を活性化させる巡回による支援法を学ぶ**上級プログラム** (特別支援教育特別専攻科「特別支援学校教諭専修免許状取得コース」および大学院)

本研究の平成25年度報告書(鳥海・廣瀬・小畑・古屋・渡邊, 2014c)に示されたように、教育現場のニーズ調査によれば、教師がインクルーシブ教育で必要とする内容は「インクルーシブ教育の理念の理解」、「多様な障害種の理解」、「他機関との連携と活用」など多岐にわたっており、特別支援教育に関する科目の必修化を求める声が多かった。

また、前報の基礎プログラム用教材の試行結果では、教材の評価は高く、授業における丁寧な省察が効果的であることが示唆された。これらをもとに、本報告では、昨年度(平成25年度)に引き続き、教員養成大学の授業において、すべての教員に必要とされる基礎プログラムを試行し、基礎プログラム案を完成させる。

## II. 目的

本報告では、教員養成大学段階で、すべての教員志望学生が特別支援教育に関する一定の知識・技能を有するための基礎プログラムを開発することを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

A 教員養成大学で一般学生に開放されている「特別支援教育総論」という名称の授業を履修している学生のうち、教員養成課程所属の学生34名を対象とした。学年構成は、1年生20名(57.1%)、3年生9名(25.7%)、4年生5名(14.3%)であり、1年生が最も多かった。なお、昨年度(平成25年度)は1年生が7割を超えていたが、今年度(平成26年度)は3、4年生の割合も高かった。

### 2. 研究手続き

特別支援教育の基礎的教材を用いた基礎プログラムの授業を試行する。

#### (1) 基礎プログラム授業の到達目標

基礎プログラムは、すべての教員志望学生が、特別支援教育の理念や障害理解を含む基本的な知識および支援に必要な技能について習得することを目標とする。

## **(2) 基礎プログラムの内容**

- 1) 障害の概念，障害の理解，障害に応じた支援に関する基本的な知識を学べるよう作成した教材を試用する。
- 2) 授業内容の理解を助ける副教材として視聴覚教材を積極的に活用する。視聴覚教材の視点を事前に説明し，視聴後にグループワークやワークシート記入を課し，学習過程を確認する。
- 3) 前回の研究結果に基づいた改善点として教育現場のニーズ調査や前回の授業試行により，副教材（視聴覚教材）を用いる際のワークシートの項目の改善及び資料プリントを追加する。

## **3. 調査方法**

### **(1) 事前・事後調査の実施**

講義の初日と最終日に特別支援教育に関する知識等について5段階評価で回答を求め，事後調査には，教材に関する評価等も加えて回答してもらった。いずれも調査票はその場で回収した。

### **(2) 調査内容**

事前調査：障害児（者）と関わった経験の有無や特別支援教育に関する関心・知識等の5段階評価（興味・関心，理念，歴史，障害種，教育の場，支援内容など）  
事後調査：障害へのイメージの変化，特別支援教育に関する知識・関心等の5段階評価（事前調査と同じ内容）と教材に関する評価

### **(3) 調査実施日**

事前調査：2014年4月17日（講義初日）

事後調査：2014年7月24日（講義最終日）

### **(4) 回収率**

事前調査は調査対象のうち出席者28名に調査を実施し，事後調査は調査対象全員の34名に調査を実施し，回収した。回収率はそれぞれ100%で無効票はなかった。

### **(5) 分析方法**

評定を求めた結果については，評定1から5までをそれぞれ1点から5点に換算し，評定平均値を算出した。

## IV. 結果と考察

### 1. 事前調査

#### (1) 障害児（者）との接触経験

全体の学生28名中26名（92.9%）が障害児と接触しており、そのうちの7割程度が小・中・高等学校時代の経験であり、同じ学校に在籍する障害児や近所に居住する障害児と交流しており、2割程度の学生が大学以降のボランティア活動や介護等体験実習などを通して障害児（者）と接触した経験をもっていた。

#### (2) 特別支援教育に関する学習経験

これまでに特別支援教育に関する学習の機会があったか否かについては、約46%が有りだと回答した。学習時期は、大学期が約74%と最も多かったが、約11%の学生は、小学校や高等学校で学んだ経験をもっており、小学校では総合的な学習の時間や道徳で取り上げられていた。

#### (3) 障害児教育に対する関心及び知識等の評定

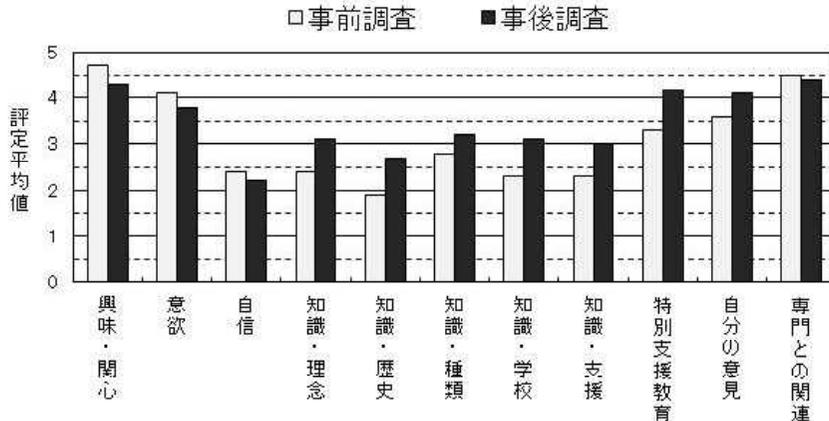


図1 意欲・自信・知識に関する評定

図1に示されたように、事前調査では「障害児教育への興味・関心」の評定平均値4.7点が最も高く、次いで「自分の専門との関連」の平均値4.5点、「障害児教育への意欲」の4.1点が高かった。逆に、「障害児教育史の知識」の平均値は1.9点、「障害児教育の場や支援の仕方や内容」など障害児教育に関する知識の評定は低かった。障害児教育に関係する知識は低く、特に障害児教育の歴史や支援の仕方においてその傾向が顕著であった点は前報も同様な傾向であった。知識に対する評定が低いのは、授業初日の調査であり、やむをえ

ないと思われる。「特別支援教育について聞いたことがある」の評定平均値3.3点や「障害児と健常児を一緒に教育すべきか,別々に教育すべきかについて自分なりの意見がある」の評定平均値3.6点の数値が比較的高かったのは,教師を目指す学生にとって特別支援教育が重視されていることを示唆しているのではなかろうか。ただし,この結果は,教員養成の必修科目ではない本授業を選択した,特別支援教育に関心の高い受講学生の結果であったことを考えると,教員養成学部所属の学生全体に一般化することは慎重でなければならない。

## 2. 事後調査

### (1) 障害児教育に対する関心及び知識等の評定

図1に示されたように,事後調査の結果では「自分の専門との関連性」や「障害児教育への興味・関心」,「特別支援教育について聞いたことがある」,「障害児と健常児を一緒に教育すべきか,別々に教育すべきかについて自分なりの意見がある」はいずれも評定平均値が4.1点以上で高かった。事前調査では2.4点であった「障害児教育の理念(考え方)」の評定平均値は事後調査で3.1点になった。「障害の種類や概念」,「障害児への支援の仕方や内容の知識」,「障害児教育史の知識」,「障害児教育の場の知識」の評定平均値についても,事後調査の結果が事前調査より高くなった。しかし,事前調査の評定平均値で高かった「障害児教育への興味・関心」や「障害児教育への意欲」,「障害児教育を行う自信」は事後調査の方が低かった。事前調査の評定では評定4と5に集中していたのに対して,事後調査では,人数は少ないが,評定2を選択していた受講学生がいたことから,特別支援教育に関する基礎的知識等を得たことによって,現実的な判断をするようになった受講学生の存在が評定平均値に影響を及ぼしたと推測される。

### (2) 教材の開発と試用

#### 1) 基礎プログラムの教材と受講学生の評価

前回と同様,以下のような「障害の概念の理解」「障害種の理解」「教育的支援の理解」の3区分15項目で構成された基礎プログラム用教材を中心に授業を展開した。

「障害の概念の理解」:「障害の捉え方」,「障害児教育(保育)の歴史的視点」,「障害児の発達とアセスメント」

「障害種の理解」:「視覚障害・聴覚障害」,「知的障害」,「肢体不自由」,「病虚弱」,「広汎性発達障害」,「注意欠陥/多動性障害」,「学習障害」

「教育的支援の理解」:「保育・療育機関などにおける障害児保育の展開」,「小・中・高等学校における特別支援教育の展開」,「特別支援学校に

における特別支援教育の展開」,「個別の教育支援計画などの作成と実施」,「クラスにおける障害児と保護者への支援」

基礎教育プログラム用教材に関する受講学生からの総合評定平均値は4.3点であり、前回と同様、概ね良好であった。「教員になってから参考になる内容がある」の評定平均値4.6点は最も高く、次いで「基礎的で初心者にとって適切なレベルである」,「教員養成に役立つ内容である」,「Q & A方式が内容を理解しやすくしている」の評定平均値は4.4点であり、前回と同様に高い評価を得た。

## 2) 基礎プログラム用教材で参考になった内容と理由

基礎プログラム用教材で最も参考になったとされた内容は「クラスにおける障害児と保護者への支援」,次いで「注意欠陥／多動性障害の理解と支援」,「知的障害の理解と支援」,「障害の捉え方」,「小学校・中学校などにおける特別支援教育の展開」であった。前報においても「クラスにおける障害児と保護者への支援」が最も多く,「障害の捉え方」,「知的障害の理解と支援」,「注意欠陥／多動性障害の理解と支援」が同数,次いで「学習障害の理解と支援」,「広汎性発達障害の理解と支援」,「小学校・中学校などにおける特別支援教育の展開」がほぼ同数であり,今回と類似した結果であった。

受講学生が内容を選択した理由(自由記述)を「全体に関わる記述」と「内容別の記述」にまとめて以下に示した。

### ①全体に関わる記述

- ・障害児と関わる人の質問から入れたので実感がわきやすく、現場や状況の想像ができたから。
- ・実際にどうしたらよいかの説明やヒントが取り上げられていたから。
- ・自分が疑問に思っていたことが分かったから。
- ・具体的ですぐに実践に取り入れることができると思ったから。
- ・知りたかったことに合致する記述があったから。
- ・わかりやすくまとまっていて、初心者にとって分かりやすかったから。
- ・自分の所属コースにも通じるものがあったから。
- ・他の授業の参考になり、分かりにくかったことも分かってよかったから。

### ②内容別の記述

「クラスにおける障害児と保護者への支援」

- ・保護者との連携は必要不可欠であるが、難しい面もあるため参考になったから。
- ・保護者への関わり方について考えられたから。
- ・家庭における支援が大切であるということがわかったから。
- ・一番現実的ではあるが、なかなか学ぶ機会のない内容だから。

- ・障害のある子どもたちとそうでない子どもたちとの関わり，学級経営で参考になる部分が多かったから。
- ・知識はほぼなかったが，とてもわかりやすい内容だったから。

#### 「注意欠陥／多動性障害の理解と支援」

- ・教員になったときに関わる可能性がより高そうだから。
- ・指導，支援の方法がわかりやすかったから。
- ・教員になってから，どのような支援を行えるのか悩みだったが，知識や考え方が得られたから。

#### 「知的障害の理解と支援」

- ・知的障害についてあまり詳しく知らなかったので参考になったから。

#### 「障害の捉え方」

- ・基本的な障害の捉え方を身につけることで，子どもたちに適切に接することができるようになったから。
- ・障害をどのように捉えればよいのか全体がわかってよかったから。
- ・「障害の捉え方」の一つの考えとして参考になったから。
- ・健常者と障害者をただ一緒に生活させるのでは全く意味がないということに気づいたから。

#### 「小学校・中学校などにおける特別支援教育の展開」

- ・インクルーシブ教育に興味をもっていて，学習障害児がどうやってクラスに馴染んでいくかを学びたかったので役に立ったから。

### 3) 副教材（視聴覚教材）の活用と受講学生の感想

受講学生の感想を「視聴覚教材全体に関する記述」「個々の視聴覚教材に関する記述」に分けて表示した。

#### ①視聴覚教材全体に関する記述

- ・映像をたくさんみることで，障害をもっている人の気持ちなどを知ることができた。
- ・いろいろな映像がみられてよかった。
- ・ビデオを観ることでより分かりやすく理解できた。

#### ②個々の視聴覚教材に関する記述

##### 「身体障害者が主人公である視聴覚教材」

- ・身体障害を持つ女性が自立し，何でも自分でして明るく生活している様子のビデオを見たこと。
- ・障害は個性であると感じた。
- ・自分のことは全て自分で全うしていたことがとても印象的だった。
- ・障害をマイナスに捉えていなくて，堂々としているところがすごいなと思った。
- ・肢体不自由でもポジティブで，私にはない前向きさがあった。

「学習障害を体験できるスライド」

- ・学習障害の体験によって実際の困難さがわかった。
- ・この授業がなかったら、その人たちにはどう見えているのか実態がわからなかったであろうと思う。

「視覚障害者が主人公である視聴覚教材」

- ・障害を持ちながらも、音楽家として活躍して、とても幸せな生活をしている人たちのビデオを見て素敵だなと思った。

「学校を舞台にした視聴覚教材」

- ・自分の障害児教育のルーツになっていくと思う。
- ・かなり（障害の）重い子どもも通常の学校に通っていることがあるということ。
- ・クラスに障害児が通っていて、友達が協力したり、一緒に成長したりしている映像が印象に残っている。
- ・普通学級に通う障害児のプールの指導の場面で深く考えさせられた。

受講学生が取り上げた視聴覚教材は、視聴後、ワークシートに記入したり、それをもとにグループで話し合いをしたりしたものが多かった。あるいは、授業の内容を理解させるために、授業者が授業中にビデオの内容を例にわかりやすく説明したりしたものであった。例えば、障害の概念の理解を深めるために、受講学生は身体障害者のビデオを視聴した後、主人公の生活状態について「障害の捉え方」で学んだ観点を使って分析したり、統合教育で直面した重度・重複障害児のプール指導について、自分が担任の立場になって話し合いをしたりした。

受講学生の感想を通して、授業者がその視聴覚教材で気づいてほしい視点をワークシートの項目に反映させることによって、基礎プログラムの目標（「すべての学校の教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を有する」）を達成するための方向づけをすることができたように思われる。

以上から、基礎プログラムにおける副教材の使用とワークシートへの記入や話し合いは、特別支援教育の理解を助ける上で有効であったと考えられる。

## V. 基礎プログラム案の提案

本報告では、前報に引き続き、A教員養成大学で一般の学生に公開されている授業「特別支援教育総論」（前期）において、基礎プログラムの試行結果をまとめた。前報と同様、ほとんどの受講学生が障害のある子どもとの接触経験を持っており、特別支援教育に対する学習意欲も高かった。したがって、特別支援教育の基礎的な教材の使用と授業の中での省察を丁寧に繰り返すことによって、特別支援教育の基本となる概念や知識を意欲的に学ぶことができたと思われる。今後、特別支援教育に関する科目を教職必修にした場合、受

講学生の増加とともに、特別支援教育に対する意欲・態度の差異が大きくなることが予想され、今回のような方法が有効であるかどうかは未知数である。2年間という限られた基礎プログラム授業の試行ではあるが、有効とされた結果を踏まえて基礎プログラム案を提案する。実際には、今回のような講義型の学習だけでなく、障害児と実際に関わる体験型の学習を組み込んだ基礎プログラムが、教員養成課程に位置づけられることが望ましい。

#### 「教員養成における特別支援教育の基礎プログラム案」

### 1. 特別支援教育に関する授業科目を教職必修科目として位置づける。

#### (1) 授業目標

すべての教員志望学生が特別支援教育に関する一定の知識・技能を習得すること

#### (2) 授業の進め方

初心者にとってわかりやすい基礎プログラム用教材と副教材(視聴教材)を活用しながら、ワークシートの活用や話し合いによる授業の省察を取り入れる。

#### (3) 授業内容

「障害の概念の理解」「障害種の理解」「教育的支援」など特別支援教育全般に関する基礎的事項を含む。

### 2. 障害理解のための体験の体系化と充実

#### (1) 介護等体験実習

#### (2) 教育ボランティア(多様な障害児との関わり)

(本研究は平成25 - 28年度科学研究補助金基盤研究(C) 課題番号25381302によって行われた研究の一部である。)

## 引用文献

- 1) 中央教育審議会(2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進.

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/\\_icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733\\_8.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf), 2013. 8. 28. 取得) .

- 2) 磯貝順子・廣瀬信雄・小畑文也・古屋義博・渡邊雅俊(2013) インクルーシブ教育に必要な教員養成に関する研究—大学の授業における基礎プログラムの検討—. 日本特殊教育学会第51回大会発表論文集, P1 - I - 12. (磯貝順子は鳥海順子の学会ネームである。)
- 3) 鳥海順子・廣瀬信雄・小畑文也・古屋義博・渡邊雅俊(2013) インクルーシブ教育を

見据えた教員養成に関する研究—基礎プログラムの実施と課題—. 日本教育大学協会  
平成25年度日本教育大学協会研究集会発表概要集, 228 - 229.

- 4) 鳥海順子・廣瀬信雄・小畑文也・古屋義博・渡邊雅俊 (2014a) インクルーシブ教育  
に必要な教員養成に関する研究—大学の授業における基礎プログラムの検討—. 山梨  
大学教育人間科学部紀要, 15, 1 - 7.
- 5) 鳥海順子・廣瀬信雄・小畑文也・古屋義博・渡邊雅俊 (2014b) インクルーシブ教育  
を見据えた教員養成に関する研究—基礎プログラム用教材の作成と評価—. 山梨障害  
児教育学研究紀要, 8, 41 - 49.
- 6) 鳥海順子・廣瀬信雄・小畑文也・古屋義博・渡邊雅俊 (2014c) インクルーシブ教育  
に必要な教員養成に関する研究の成果と課題 平成25年度報告書. 山梨大学障害児教  
育研究会, 65 - 69.